優しい嘘

大阪医療技術学園専門学校

須本 凛

　私が小学三年生の頃、発達障がいのある女の子と出会いました。

当時の私は人見知りで友達も少なく、放課後に遊ぶ人は決まって彼女でした。

鬼ごっこやかくれんぼをして夕方まで時間を潰し、決まって「また明日な！」と別れるのが友達の少ない私にはとても嬉しかったことを今でも覚えています。

四年生になった私は以前よりも人見知りが治まり、友達も増え彼女以外の友達と遊びに行く事が多くなりました。

四年生になると授業の内容も難しくなり、高学年への準備期間となって、みんなが少しずつ成長していく中、彼女だけが変わらないように見えました。

漢字ドリルや計算ドリル、連絡帳やリコーダーなどの忘れ物がとにかく酷く、毎日先生に叱られている彼女。また、授業中によく立ち歩き、「今日は遊べる？」と席の離れた私の元に聞きに来ることもあり、私たちと違った行動をする彼女のことが苦手になっていきました。

そんな中彼女の方から「土曜日遊ぼうや！」と誘ってきたのに、約束の公園に来なかった事が引き金となり、彼女と距離を置くことにしました。

同級生が彼女に対して「あいつめっちゃ忘れ物するやん」「いつも先生に怒られてるよな」と言っているのを聞いて、彼女のいい所を一番知っているはずの私も「そうよな。もっと気をつけたらいいのに」と同級生の言葉に共感してしまいました。

三者面談では「誰と仲良しか」という先生の質問に彼女が、私と一番仲良しと答えてくれていたようで、後日先生が私に「あの子と仲良しやねんな！忘れ物多いし気にかけてあげてね」と声を掛けられ、私たちの思う普通とは違う彼女と仲良しだと思われることが恥ずかしくて、泣いてしまい先生を困らせてしまったこともありました。

ある日の昼休み、私がクラスで飼っているザリガニの掃除当番だったことを忘れ、急いで水槽の掃除をしようとすると、昼休み終わりのチャイムがなってしまい慌てていました。彼女が「どうしたん？」と

声を掛けてくれ、私が「水槽の掃除するん忘れてた」と言うと、「手伝おうか？」と言ってくれました。
「大丈夫」と断ってしまいましたが、先生も来てしまいどうすることも出来なくなりました。
生き物が好きな先生だったので教室に入ってすぐ「あれ水槽洗ってへんやん、当番誰？」と聞かれ、教室がざわつき始め、怒られてしまうと怖くなって泣きそうになっている私を見て、当番が私である事を知っている彼女が「あっ、私や！当番やったこと忘れてた！」と言い出しました。
クラスの子たちの「またお前かよー」という声と、先生の「また授業終わったら洗っといて」という声に笑いながら「ごめんー」と言っている彼女の顔を今でも忘れません。
授業終わりに彼女と水槽を洗いに行き、「なんで嘘ついてくれたん、当番私やのに」と言ったら「先生に怒られるんって怖いやん？でも忘れん坊の私やったら、もし怒られてもすぐ忘れられるからと思って」と言ってくれ、「ごめんね」と言ったら「なんで謝るん？すぐ忘れる私の方が悪いやん、いつもごめんねありがとう。」と言ってくれ、自分の情けなさと彼女の優しさでまた泣いてしまいました。
あとで先生に私がザリガニ当番だったことを伝えて謝ると、「そうなんや。次から気をつけてね」と声を掛けてもらいました。
先生に怒られることやみんなに責められることなどの感情の恐怖は誰でも忘れることはないのに嘘をついてくれたこと、私を庇ってくれたこと、物やスケジュールを忘れたくて忘れているのでは無いこと、私の思っている普通とは違うというだけで彼女を遠ざけていたこと、彼女の優しさ、私は立て続けに忘れ物をしないし、授業中は立ち歩かないけれど、私には彼女のような勇気と優しさはないです。
私の普通の価値観は他の人から見たら普通では無いし、人によって普通の基準は違い、それを人に押し付けることは良くないんだなと学びました。
彼女とは今でも仲良しで今回作文にしていいかと聞いた時、「いいけどそんなことあったっけ」と言ってくれました。
そんな彼女が大好きです。